

フォークナーの『征服されざる者』について

A Critical Appraisal of Faulkner's
The Unvanquished

花 本 金 吾
(Kingo Hanamoto)

1

1938年に出版された『征服されざる者』(The Unvanquished)は、同一の時代的背景と同一の視点とによって結び合わされた7つの短篇から成り立っている。同一の時代的背景とは、南北戦争勃発1年後の1862年から1874年に至る12年間であり、同一視点とは、「私」とベイヤード・サートリスである。この短篇集は、この時には既に可成りの老人になっている「私」が12才から24才に至る12年の間に味った数々の経験を物語る、というちょうど『自動車泥棒』(The Reivers, 1962)の場合と同様の回想形式を取っている。

南部の興亡の歴史そのものを生きた名門サートリス一家が、第1次大戦直後の1919年頃のような没落の運命を辿っていったかは、第3作の『サートリス』(Sartoris, 1929)に詳しい。『サートリス』では、「私」の父サートリス大佐は既にこの世になかったが、南部と共に没落し、現状に対してまったく無力であった一家は、大佐が象徴する過去の栄光にしがみつぎ、大佐の姿を益々大きなものにしていき、遂に彼を伝統化し神格化した。そしてその伝説化され神格化させられた大佐の翳が、逆に現存の一家を一層みじめにしていく……。こうした救いのない現状がある孫ベイヤード3世のフラストレーションの源であり、死の原因であった。この一家によって

象徴される南部の没落の相が、『響きと怒り』(The Sound and the Fury, 1929)のクエンティン・コンプソンをも亡していくのは、今更いうまでもない。

『征服されざる者』は、こうした現状に至る前のサートリス一家の過去へ、フラッシュバックの形で溯る物語である。

この作品は、今迄のところ、殆どの批評書で無視されてきた。無視されないにしてもそのためにかかれる紙面は常に少なかった。そしてその理由は根本的には物語性が強く、思想性が希薄である、という考え方によっていたように思える。(注1) こうした考え方はこの作品に収められた7つの短篇のうち6篇までが、雑誌に掲載されたものである、という事実にも起因していたように思える。

事実、7つの短篇のうち最初の5篇は、いずれも Saturday Evening Post に掲載されたものであり、6番目の「サートリス家での小ぜり合い」(“Skirmish at Sartoris”)は、1935年4月号の Scribners に掲載されたものである。最初の5つの掲載年月日を作品に収められている順に並べれば、「待伏せ」(“Ambuscade”) (1934. 9. 29)、「退却」(“Retreat”) (1934. 10. 13)、「襲撃」(“Raid”) (1934. 11. 3)、「第3の突返し」(“Riposte in Tertio”) (1936. 11. 14)——これは、もと「征服されざる者」という表

題で掲載された——「復讐」(“Vendée”) (1936. 12. 5)となる。そして第7番目、つまり最後の作品だけが、この短篇集が出される折に新しく加えられたのである。

こういうわけで、恐らくこれらの6篇が、書き下しの作品以上に、読者を意識して書かれたであろう、と想像されるのはもっともなことである。実の処、これら6篇の中にフォークナーがそれ迄係わりあって来た何らかの問題意識や主題といったものを読み取ることは先ず不可能に近い。『サートルス』以降フォークナーが目的意識や使命感を持った真摯な作家に成長した事実やその成長への経緯は既に何度も触れてきた。ヨクナパトゥファなる仮空の郡は、彼が人生の真の意義を追求するための、かけがえのない基盤であった。彼はそこにどっかと腰を据えあらゆる人生問題に光を当て、たじろぐことなくそれを見つづけ、解決を与えようとしてきた。『サートルス』以降『征服されざる者』の前作『アブサロム・アブサロム!』(Absalom, Absalom! 1936)に至るフォークナーの姿は、一口に言えば、こうしたのっぴきならない問題を見つづけ、解決を与えようとして懸命に努力する姿であった。そこには憑かれた者の持つ執念といったものさえ感じられた。彼は常に前進的であった。読者を意識して、というより常に彼自身のために書く、という真面目な作家であった。決して過去を振り返って懐しむ懐古的な姿勢は見られなかった。そうした彼が突如、一見今迄とはまったく正反対と思える姿勢で、主題の鮮明でない懐古趣味的な『征服されざる者』を書いたのである。今迄のフォークナーに期待をかける者は、この変貌が作者の墮落を意味するものとして批判的に受け取った。目的意識を失った単なるストーリーテラーとしてのフォークナーを読み取る者が多いのである。

だが、この作品がフォークナー独特のあの神話を造り出していく上で大きな貢献をした、という考えは正しい。早い話が、もしこの作品が描かれなかった場合、サートルス一家が僕たちにあれ程印象深い一家になり得たかどうかを考えてみるといい。じっさいに読者は、彼があ連綿とした神話をどのようにして生み出していくのか、その過程とテクニックをこの作品に見ることができる。彼の作り出す作品がそれぞれ芸術品として独立した存在であるのはいうまでもない。しかしそうした独立した作品には、同一の人物が、時には若い姿で、また時にはもうすっかり老人になった姿で登場する。そしてある作品で苦渋に満ちていた者が他の作品では歓喜に満ちている。そうかと思えば、フェースの対象でしかなかった者が次には真面目に扱われる。サートルス家、コンブソン家、スノープス一族、マキャスリン、ギャヴィンなど、枚挙に暇がない。こうした人物は、作者に対しては一体となってフォークナーをその唯一の所有者としたあのヨクナパトゥファ郡の総合体を築きあげる人物であり、また読者にむかっては、この連綿とした総合体の深さと広大さを強烈に印象づける人物である。これらの人物は、決して一面的に描かれることはない。人間らしい弱さと、愚かさ、また同時に強さと知恵とを持った人物なのだ。それぞれ生活の歴史を重く背負った人物なのである。フォークナーの神話の深さと大きさの1つの理由は、これらなじみ深い人物が色々な角度から何度も描かれること、それでいて彼等が彼の豊かな想像力によって見事にインテグリティを与えられていることであろう。

さて、この短篇集の思想の希薄さを疑わせる第2の理由は、真面目な主題を荷うにはあまりにもヒューモアやほら話がすぎる、という点にあった(注2)。

たしかに、たとえば第1話の「待伏せ」——北軍の兵士の馬を狙撃した「私」と黒人の友だちリングは、おばあちゃんのスカートの下に身を隠している。そこへ入ってきた北軍の将校がスカートの下の子供を発見しながら、あたかも南部の紳士のように騎士道精神を発揮して見逃すくだけり——また、第3話「襲撃」での1節——奪われたトランク1個とラバ2頭、それに黒人奴隷2人を取り戻しに行った「私」たち3人が、単語の聞き違いからトランク10箱、ラバ110頭、それに黒人多数を得るに至る話——などは、読物としては面白いが、しかしそれまでのフォークナーの真摯な姿勢を知っていてこの作品にも何らかの思想性を読み取ろうとする読者にとっては、それは失望以外に何ももたらさないであろう。（しかしフォークナーがこうしたヒューモアやほら話を用いたのは、それだけの真面目な理由があったのは後で触れる。）

しかしこうした大方の批判にもかかわらず、僕はやはりこの作品に明確な主題が存在する、と考える。たしかに他の多くの作品に比べて物語性が思想性を圧倒しそうなのは紛れもない事実だが、この作品は、最後の作品「くまつづらの匂い」が書き加えられることによって、1つの主題のもとに統一された、と僕は考えるのだ。つまり、最初の6篇で述べられた事柄は、それだけでは駒切れのエピソードに墮し兼ねなかったが、最後の作品によって、1つの主題を浮び上らせて効果的な物語になった、と考えるのである。フォークナーは、自分が感じ主張したいことを、そのまま生の形で作品に注入するような、ある意味で思い上がった作家ではなかった。

明確な信念を持つに至った後期の作品においてはそうした傾向は僅かばかり感じられないこともないが（たとえば『墓場への闖入者』 In-

truder in the Dust, 1948) のギャヴィン・スティーンには代弁者の要素が感じられる)、殆どの場合、フォークナーは事柄や人物の行動を直視することにより、その事柄や人物の行動に物語らせようとした。そうした事柄や人物の行動にある意味づけをするのは、もちろん作者に違いないが、それはどこまでも事柄や人物という具象の中でなされるのである。従って、具象の中でフォークナーの意味づけをさぐる仕事は、常に読者に任せられている。フォークナー文学の難解さはあの難渋な文体だけによるものではない。

僕は、この作品に明確な主題の存在することを言った。そしてその主題は、最後の作品によって明確になったことも言った。そこで、ではその主題とは何か、また最後の作品が加えられることで作品の内的関係にどのような変化が加えられたのか、ということが最大の課題であろう。

II

そこで先ずこの作品の題名である『征服されざる者』が誰であるかを、少し考えておくことが順序であろう。

しかしここで注意しなければならないことは、最初の短篇から6番目の作品に見られる「征服されざる者」と、最後の「くまつづらの匂い」に見られる「征服されざる者」との間には、明らかな違いがある、ということである。その違いは、一口に言うならば次のようになるであろう。つまり、前者が文字通り北軍の侵略とそれに伴う生活上の変化に対して征服されることを拒み、反逆を試みたという、いわば表面的に「征服されざる者」であって、こうした姿勢が男性よりも女性に多く見られるのに反して、後者は、伝統や周囲の力に屈せず、いわば

もっと高次の、自己の正義の声に従おうとする、人間的に「征服されざる者」なのである。前者は表面的で形而下の「征服されざる者」であり、後者は、やがてあの人間性不滅の信念に凝結していくところの、象徴性を秘めた「征服されざる者」なのだ。そしてこの後者の姿の中にこの作品の主題を僕が読み取ろうとしているのは、既に述べた通りであるが、これはこの小論の結論であるのだから、後でもう1度触れたいと思う。今ここで先ず考察の対象にするのは、前者に属する「征服されざる者」である。

先ず「おばあちゃん」(Granny)ことローザ・ミラード(Rosa Millard)がいる。サートリス大佐の義理の母にあたる彼女は、「待伏せ」では、「私」とリンゴをスカートの下に隠して北軍の将校から守り、「退却」では北軍兵が跋扈し、南部の家々が破壊された中を、無防備のまま、「私」とリンゴを連れ、馭者に黒人召使いジョービー(Joby)を従えてジェフソンから彼女の姉の住んでいるメンフィスまで強引に行こうとし、「襲撃」では、奪われたトランクを求めて、2人の12才の子供を連れて敵の陣営に乗り込み、「第3の突返し」では、北軍の馬を巧みに奪い返すことによって、静かに北軍に抵抗を試みる、といった、まさに「征服されざる者」の代表者なのだ。

たしかに読者は、この老婆のたくましさの中に、何ものにも屈することのない不屈の精神を読み取り、彼女のスカートの下に庇護されなくとも、安心感とたのもしさを感じるのである。このたくましさは、危険に臨んだ時に発揮されるあの女性個有の本能的な強さに深く根ざしているだろう。これはいかなる男性も持ち得ない強さなのだから。だが、そればかりではない。彼女があれ程強くあり得たのは、「男性は女性を傷つけるものではない」という、南部の

伝統的な考え方を彼女がまだ充分信じ、またそれに従って行動できるほどの古さを社会がとどめていたからである。南北戦争は、それまで南部がかたくなに守りつづけてきた伝統を根底から揺り動かし、破壊せずにはおかなかった。土地私有制度と奴隷制度を2つの柱とする農耕経済と、それに基礎をおいた保守的な生活態度や考え方が、南北戦争を契機として、激しく変更を迫られたのであり、この作品はまさにそうした激動の時代を背景にしている。この作品にそれとなく描かれる混乱の相を読み落してはなるまい。

こうした混沌の時代は、当然様々な種類の人間を生む。そうした混沌に激しく抵抗し、益々古く良き時代へと退行する人間、退行はしないが新しい変化を無視することによって混沌に抵抗する人間、新しい変化が起りつつあることをすら意識しない無邪気な人間、過去にまったくとられず現実の変化を鮮かに利用し栄えていく人間、等々……。

ローザ・ミラードの場合もこうした背景の中でとらえていかなければならない。

彼女は、一口でいうなら、新しい変化を無視することで抵抗を試みるタイプの人間であった。彼女の行動はすべて、「戦争は男の戯れである」、「男性は女性をいたわるべきものである」という南部の伝統的な考え方にその発想形式の基盤を持っている。彼女は、戦争が男女のへだてなく人間を破壊するものになっている事実を理解しないのだ。彼女の行動は、すべて自分が女性であることを利用した一種の「甘え」なのである。それにこの「甘え」は、古い社会では当然許されてきた社会上の約束事であり、儀式であったのだ。彼女の抵抗は、この甘えを通してのみなされる。そしてそれを受け入れる社会の善良さはまだ可成り残っていたのである。

その典型的な例は、「待伏せ」で2人の子供をスカートの下に隠したローザが、その2人の子供を探しに来た北軍のハリソン(Harrison)大佐と会話を交す場面と、「襲撃」でトランクを取り返しに北軍陣営に行く場面に見ることができる。ハリソン大佐はローザが子供を隠しているのを見抜いていながら、老婆が「この家には子供はいない」という嘘の供述を敢て否定しようとはしない。否定しないどころか、ハリソン大佐は自分に3人の男の子があることを言ってノスタルジアを披露し、ローザに同情をさえ示すのである。つまり、これは、ローザが儀式が守られることを信じて行動したのに対して、ハリソン大佐がそれに応えた、という場面である。互いに儀式に則って行動するところに、この場面のヒューモアが生れる最大の原因がある。「襲撃」に見るヒューモアもまったく同じ性質のものである。これらの場面に見られるヒューモアは、従って当然儀式がまだ生きていたことを強調するためのものであって、それは作者の側の不真面目さを意味するものでもないし、殊更に笑いを作り出すための駄洒落でもない。最初の「待伏せ」から「第3の突返し」に至る4つの作品を蔽う強いロマンチズムの雰囲気は、まだ無邪気であった少年の目を通して描かれた結果であるというより、この儀式を守る人々によって醸し出されている。

このようにローザは、常に儀式を信じ、それに則って行動する女性であった。北軍に対する時の彼女はいつも、「いくらヤンキーだって老婆に危害を加えることはしない(注3)」という考えがあった。

こうした考えの彼女が、やがて亡ぼされていかなければならなかったのも、当然の運命であった。なぜなら、彼女の強さは、儀式が守られる場合においてのみその真価を発揮し得る強さ

だったのであり、時代の変化はその儀式を跡形もなく破壊してしまう趨勢にあったからである。しかもこの老婆は、外部の者たる北軍によらず、彼女と同じ土壌に育った筈の南部人、つまり同族ともいえるグランビー (Grumby) によって殺されたのである。この皮肉の中に、僕は南部の根深い混沌の相を読み取るべきだと思う。

たしかにグランビーもこの時代の犠牲者には違いない。激動する時代が完全に彼の自己を失わせ、卑劣漢にしてしまったのであるから。そしてまた、そうした彼を許せずに、彼を懲めようとして追跡するボーデン (Bowden) やブリッジャー (Bridger) のような人物が、まだ南部に残っていたのも事実である。だがそれにしても、南部がグランビーのような人間を生み出すほどの混乱の相に沈んでいたのは、紛れもない現実なのである。

さて、ローザの外にはどんな「征服されざる者」がいたであろうか。

サートリス大佐の妻になるドルシラ (Drusilla) は、古い儀式的な考えに固執するのみか、女性である自分を男に変えようと不可能なことを求めた点で、ローザに較べ一層悲劇的である。南北社会が期待する女らしさをかなぐり捨て、男装をしてサートリス大佐の率いる軍隊に入ったり、帰還後結婚式も挙げずにサートリス大佐と復興に力を注ぐ姿は、一見、新しいタイプの女性を思わせる。しかし彼女が男装して軍隊に加わったのは、結ばれることもなく戦死した自分のフィアンセの仇を討つためでしかなかった。肉親の仇を討つ、という南部の古い掟を守るために彼女は「女性」を失って「男性」になる必要があったに過ぎない。彼女がいかに古い女性であったかは、「くまつづらの匂い」で今や彼女の夫になっているサートリス大佐が殺

された時に一層はっきりする。たいした愛情もなく結ばれた男であっても、夫は夫なのである。その夫が殺されたとなると当然仇討ちをしなければならない。実際に仇討ちをするのは、大佐の息子である「私」ことベイヤーであるが、彼女は義理の息子がやることとして放っておくことができないのである。訃報を聞いてオックスフォードの大学から急ぎ帰宅した「私」に向って、彼女は、父の死を悲しむ暇も与えずに、次のように言って2丁のピストルを手渡そうとするのである。

「受取って頂戴。あなたの為に私が取っておいたのよ。これをあなたに上げるわ。きっと私に感謝する時が来るわ。神様だけの持物といわれているものを、天から受取ってあなたの手に渡したのが誰だったのか、あなたは忘れはしないわ。さわってごらん。長くて正義のように真実の銃身、それに天罰のように素早い引き金（あなたはその引き金を引いたことがあるわ）。2つともほっそりとしているけれどしっかりしていて愛する肉体のように絶対的なもの。」(注4)

そしてそのすぐ後で頭にさしていた2本のくまつらの小枝を抜きとり、1本を「私」に渡し、もう1本を捨て去るのである。馬の匂いに打ち消されることのない唯一のものとして戦場でも髪にさしていたくまつらの小枝は、もちろん「勇気」を象徴している。女性である彼女が男性に伍して活躍するのに必要な、あのゆがんだ勇気を。そしてここで彼女が2つのピストルと1本のくまつらとを「私」に手渡し、もう1本の方を捨てる仕草は、次のことを象徴していよう。つまり、仇を討ちたい気持は強いが、ここは戦場ではないから社会の掟に従わなけれ

ばならない。仇討ちは男の仕事である。すべてをベイヤーに任せなければならない彼女ができることは、自分が持ち続けてきた男まじりの「勇気」をベイヤーに注入して彼の勇気を2倍にしてやり、自分は本来の「女性」に戻ることである、と。

だが、「私」はそうした彼女の気持を理解しながらも、彼女の贈物を喜び勇んで受取ることができないのである。仇討ちの空しさを既に「おばあちゃん」の仇討ちの時に感じた「私」は、そうした仇討ちを強いる南部の掟のむなしさを矛盾と叫ぶ魂の声を無視し得ない人間になっていたからである。ドルシラは、ピストルを受取るのを一瞬たじろぐ「私」を見て、やがてヒステリカルに笑い始める。そしてその洪笑はとめどもなく、死人の横たわる家中の空気を揺がすのである。それは「私」に対する軽蔑と彼女自身に対する自嘲の笑いであった。喜び勇んで彼女の贈物を受取らなかった「私」の行為を彼女は勇気のない卑怯な行動と勘違いしたのであり、そうした卑劣な男であることを見抜かなかった自分自身をあざわらったのである。

彼女は、男に生れてくるべき人間であった。彼女の悲劇はそこにあった。

その外「征服されざる者」の範疇に入る者としては、ヘイバッシュ夫人 (Mrs. Habersham) をはじめとする多くの一般の女性と、バックじいさん (Uncle Buck) やワイアット (George Wyatt) などの大勢の町の男性とがいる。彼等は、時代の推移に伴う南部の変化にもかかわらず、依然として伝統を保持しようとする点でたしかに「征服されざる者」ではあるが、しかし変化が起りつつあることさえ意識していない点で、積極的に抵抗する者とは言い難い。彼等の認識程度は、子供のそれに等しいのである。

以上の人物は、いずれもあるいは具体的な敵

に対して、あるいは時代の変化という抽象に対して、抵抗し、征服されまいと試みながら、空しく破れていった人物であった。儀式という条件の中での抵抗は、その儀式が失われた瞬間に敗北するし、古い価値を固執しようとする努力はせき止めることのできない時の流れに押し流されて挫折する。第一彼等には、自分たちが懸命に守ろうとする儀式や伝統が果して本当に正しく、命を賭しても守るだけの価値があるのかどうか、という問題についての反省すらないのである。敗北を認めない誇り高い精神だけでは、何をどう変えることもできない。それは、彼等を頑迷で一徹な人間にするにすぎない。これらの「征服されざる者」はどこまでも表面的な意味においての「征服されざる者」でしかない。フォークナーが言う本当の「征服されざる者」ではないのである。

真に「征服されざる者」の代表は、もちろん、最後の「くまつづらの匂い」で漸く深い人間的な認識に目覚める「私」ことベイヤード・サートリスと、どのような時代の流れにもとらわれることなく常に人間的であろうとするジェニー叔母 (Aunt Jenny) の2人である。2人の違いは「私」が南部の掟を体験し、その掟の空しさを味い、そこで悩みながら模索して、経験と思索を通して徐々に「征服されざる者」の認識を持つに至ったのに対して、ジェニー叔母は、そうした認識をより多く本能的に持っていた、ということだけである。従って、「私」の認識の方がより苦渋に満ちており、説得力がある。そしてその認識は次のようにして獲得された。

「私」は最初の「待伏せ」からすべての事件の目撃者であった。南軍の敗北と共に古い南部の伝統が大きく解体する現実の中で、「私」はその転換の相を象徴する様々の事件を目撃し、

様々の人物に取り囲まれた。黒人ルーシュ (Loosh) が黒白平等を叫んで主人サートリスに反逆し、「おばあちゃん」が同じ南部人に殺され、混乱を背景にスノーブスが抬頭していった。

古い伝統を受け継いで育った「私」は、当然こうした解体の相に対して、伝統を守る側に立っていた。12才になって気がついてみたら守る側に立っていた、ということであって、そこには「私」が選択する余地はないのであった。実際、「おばあちゃん」の仇を討ち、グランピーの右手を切り取って「おばあちゃん」の墓に供えるあの瞬間まで、「私」はリングと共に南部伝統の無批判な継承者であった。

だがこの事件は、「私」を一気に大人に成長させる上で決定的な役割を演じた。この事件は、いわば大人へのイニシエーションを印す祭礼 (ritual) であった。しかし南部の掟に従って仇討ちを果した後に感じたものは、激しい歓喜ではなくて漠とした空しさと復讐のためとはいえ人を殺したことに対するかすかな良心の呵責であった。そしてその空しさや罪の意識は、南部伝統への懐疑となって徐々に「私」の心の中に定着した。懐疑が深まるにつれて「私」の懊悩もその深さを増していった。懊悩の原因は、自分が当然受け継ぎ次の世代へ引き渡すべき南部の伝統に対して強い愛着を抱きながらも、その伝統が人間の良心の叫びに沿ったものでないところにあった。この二律背反が見事に統合されない限り、「私」の心の安らぎはない。すっかり埃をかぶって良心の声をうけつけなくなった伝統に無条件に従っていくことももはやできなければ、かたく自己の中に退行してしまうという卑怯者にもなれなかったからだ。

「私」は長く苦悩した。だが24才の秋、下宿先のウィルキンズ (Wilkins) 教授の家で父の訃報に接した時には、既に1つの結論に達していた。統

合のための可能性を心では理解していたのだ。もっともそれを行動にまで高めるだけの勇気があるかどうかは判らない。だからこそ、「私」は

「少くともこれは、僕自身が考えている通りの人間であるかどうか、または、ただそうありたいと望んでいるだけなのかどうか、常日頃正しいことだと自分に言いきかせていることを本当にやれるかどうか、それともただそうすればいいと願っているだけのことなのかを、知る機会になる筈だ(注5)。」

と自分を叱咤するのである。

つまり、これは完全に自己の良心の声を無視し得なくなった者の姿である。伝統や社会の慣習がどうであろうとも、それらの重さから一時的にでも自己を解き放って、自己の良心に忠実であろうとする者の姿である。「私」は、ウィルキンズ教授の家からわが家へと急ぐ馬の背で、いよいよ迫り来る試練に対して覚悟を固めるのである。

そしてこの覚悟は、今はじめて安らぎというものを知ったかのように、もの言わぬ姿になって横たわる父と最後の面会をする時、揺ぎないものになっていく。南部の伝統や規範の良い面を作りあげ、補強していった恩人としての父、同時に仇討ちという名分のもとに殺人を強制するなど、悪い面もあわせて補強せずにはおかなかった父、敵に激しく抵抗した軍人としての父、南部の荒廃を愁い、復興を目指してひたむきな努力をかたむけた父……。 「私」は、肉親としての父に激しい愛情と哀惜の念を、また南部を支えた恩人としての父に感謝の念を抱く。しかし、同時に血を血で洗う悪の伝統を更に押し進めた点で、彼を無批判に受け入れることはできない。彼を殺したこの悪は、やがてサートリス家を、南部を、いや人類を滅ぼしかねない。

その悪は亡ぼされなければならない。この場合、父はもちろん南部そのものの功罪を秘めた象徴的な存在である。

かくして「私」は無防備のまま、ピストルを持ったレッドモンド (Redmond) と対決した。生々しい良心と硬直した伝統との対決であった。この対決に、「私」がどれほどの勇気を必要としたかは、言うまでもない。

この「私」の気持を一部始終理解し、深いいたわりと同情を示し得るのは、サートリス大佐の妹のジェニーだけであった。自分の夫や兄をはじめ多数の肉親の男たちが戦争を頂点とする数々の愚行を繰返すのを見続けてきた彼女は、人間が持つ愚かさを憎みつつも、その愚かさにどうしようもなく翻弄される人間に愛情と同情を注ぐのである。彼女は生が必然的にもたらす悲惨を、勇気をもって耐える強さを持った人物なのである。この強さは、本能的な色彩が濃い、しかし儀式とか慣習の圧力をはるかに超えている。

これら2人の人物が真に「征服されざる者」である、と僕が考えているのは既に述べた通りである。彼等は、具体的な敵に対して「征服されない」のではなくて、人間の持つ弱さや過去の圧力に対して敗北を認めない人物なのだ。こうした人物こそ南部を救い、やがて全人類を救済していくであろう。

IV

このように見て来ると、最後の「くまつづらの匂い」がこの短篇集に占める比重の大きさが判ろう。この作品によってこそ、その前の6つの作品の各々の物語が1つ主題のもとに統合され、それがこの短篇集に深さと大きさを付与するのである。もしこの最後の作品が加えられなかったなら、各々の物語の事件は各々独立し

たエピソードに終わっていた筈であり、その場合は、この短篇集全体が何ら意味のない平板的な作品に墮していたに違いないのである。

ここで、もし最後の作品に主題の中心があるとするならば、その前の作品を6つも並べる必要が制作上果してあったかどうか、という問題が残るのである。しかし、「私」が最後に持つに至るあの認識とそれに基く行為は、一日にして達せられたものでも、またなされたものでもない。長い苦しい準備期間を必要としたのである。つまり、「私」は、6つの作品に描かれているような事件をすべて体験することによってのみ、伝統と良心とを融合架橋する必要を感じ出したのだし、そのための具体策も考え及んだのである。つまり、これら6つの作品は、「私」が真に「征服されざる者」に成長するための、かけがえのない段階なのである。同時にそれによってのみ、読者は、最後の作品の意味を正當に理解するのである。

このような書き方のものには『モーゼよ、往きて下れ』(Go Down, Moses, 1942)があるが、この作品については既に他の機会に触れた通りである(注6)。

なお、これら7つの短篇は、1人の少年が体験したこととして年代順に書かれている。この手法は、この場合のように、この少年がやがて1つの明確な認識を持つに至るその経緯や意味が主題となっている作品では、実に適切な方法であろう。瑞々しい良心を持つ少年がやがて大人の世界の穢れを知り、それに同化されることなく、逆に、自分の良心で汚い大人の伝統の世界を是正しようともがく姿は、この短篇集の前に書かれた『アブサロム・アブサロム!』にも既に萌芽的に見られるが、先刻の『モーゼよ』のアイザック・マキャスリン(Isaac McCaslin)や『墓場への闖入者』(Intruder in the Dust,

1948)のチック(Chick Mallison)、また『自動車泥棒』(Reivers, 1962)のルシアス(Lucius)、などに鮮かに見られるのである。

この姿は、常に良心の声を無視し得なかった真摯な作家フォークナー自身の姿を色濃く投影しており、彼が求めてやまなかった真理追求の仕事では、もっとも使いやすい手法の1つであった、と考えるが、この手法の問題については、後日稿を新たにして論じたい。

さて、「私」は確乎たる認識のもとに、勇気をもって、南部の掟を破る行動をした。破られた掟は、破った人間に制裁を加えるのを常とする。破る行為が良心の声に従ったものである場合でさえ、掟を侵したという名目で命が危険にさらされることすら起りかねない。だから良心の声に従って行動しようとする者は、危険を耐えしのび、自分がひき起した一時的な混乱の責任を取るだけの勇気がなければならない。そうして生きる時、一個の弱い人間は、確実に規範を変えていく。固枯した伝統や規範をヒューマンイズムのレベルにひき上げることにより、社会を変えていくのだ。ここらあたりに過去の魔力や社会の圧力を超越する現存の個の尊厳に勝利を与えようとするフォークナーの姿が読み取れる。

だが個人の善意が横に広く拡がるメカニズムは、まだこの作品では描かれていない。「私」の行為が、どのようにして伝統を変え得るのか、そのメカニズムを明らかにするためには、フォークナーは、すべての人間が同等のヒューマンイズムを失わずに持ち続けていることを自己のために証明しなければならなかった。もう少しで人間性不滅の信念に辿りつくところまでできているが、その信念への道は決して平坦ではなかった。彼は、『墓場への闖入者』まで模索しながら書き続けなければならなかった。

(1968・8・15)

Notes

1. たとえば、Olga Vickery は The Novels of W. Faulkner (Louisiana State Univ. 1959) でこの作品を完全に無視しているし、William Faulkner—A critical study (Vintage Books, 1951) の著者 Irving Howe も、Faulkner の M. Millgate も批判的である。わずかに E. Volpe (A Reader's Guide to W. Faulknerの著者) や Cleanth Brooks (W. Faulkner—The Yoknapatawpha Countryの著者)、H. Waggoner (W. Faulkner—From Jefferson to the World の著者) などが、この作品を serious work と考えようとしている。
2. たとえば、この作品を serious work と考えようとする Volpe できえも、“Unfortunately, whenever Faulkner attempted to render the past as it probably existed in his boyhood imagination, he tended to resort to melodrama and sentimentality.” (前掲書 p. 86) と言っている。
3. The Unvanquished (Signet Books, 1952) p. 97
“Even Yankees do not harm old women.”
4. Ibid., p. 150
“Take them [=pistols]. I have kept them for you. I give them to you Oh you will thank me, you will remember me who put into your hands what they say is an attribute only of God's, who took what belongs to heaven and gave it to you. Do you feel them? the long true barrels true as justice, the triggers (you have fired them) quick as retribution, the two of them slender and invincible and fatal as the physical shape of love?”
5. Ibid., p. 136
: At least this will be my chance to find out if I am what I think I am or if I just hope; if I am going to do what I have taught myself is right or if I am just going to

wish I were.

(このイタリック体は「私」の内的独白である。)

6. 拙稿「往き暮れた個人の善意——『モーゼよ、往きて下れ』の場合」——「ワセダ・レビュー第四号」を参照されたい。